

傑作歌選
第三輯
窪田空穂
集歌五他(野るひま)



特

4



始



土岐哀果氏歌集 はつ戀

總革天金箱入小形二〇〇頁
定價金七十五錢 送料金六錢

窪田空穂氏歌集 濁れる川

背布天金箱入菊半二五〇頁
定價金六十錢 送料金六錢

内藤銀策氏歌集 旅 愁

紙裝天金箱入菊半二八六頁
定價金七十五錢 送料金六錢

傑作歌選
第三輯
窪田空穂
1902—1914

大正
4. 12. 14
内交

窪田空穂
1902—1914

特100
445

目次

まひる野(五)	自明治三十五年作	四十四首
明 暗他二歌集(二)	自明治三十八年作 至明治四十四年作	三十八首
濁れる川 其一(三五)	自明治四十五年作 至大正元年作	三十八首
濁れる川 其二(四九)	大正二年作	四十四首
濁れる川 其三(六五)	大正三年作	三十八首



來ては倚る若葉の蔭や鳥啼きて鳥啼きやみ
て静寂にかへる

浅緑敷きては遠き草の中わがふる里の響き
こゆる

人とわれ黙しても立つ磯の上波まろらかに
走りて還る

青嵐胸ただよはす子雀の飛ばんともする翅
のふりや

わが胸に觸れつかくるものありて捉へも
かぬる青葉もる月

露にぬれてゆらぐ朝野の細き草吹かば鳴る
らん莖にしあるべし

そぞろにも逐はるるとき思ひして京に入
りけり青葉するころ

はかな心地涙とならん黎明しのひのかかる静寂しじまを
鳥来て啼かば

大海わたつみの波たはぶれて足に寄ると立ちぬ青野
の薄月の中

何はあるも神は安きに導かん東は京か舟流
れ行く

砂白き磯につくばひ秋の日を大海原に手を
浸ひたし見る

音立てて踏むにくづる霜柱母に別れて里
出てて行く

雲よむかし初めてこの野に立ちて草刈り
 七人にかくも照りしか

夜をそぞろ園に出てては秋花の繁みの中に
 顔埋めて見る

松の葉の寒きかけ踏む岡の晝袂あはせて遠
 く眺むる

秋は來ぬ杜にこもりて啼く鳥の澄みてする
 とき響を聴けや

摘みし草に誰が名負はせん佐久のゆふべ千
 曲の川の北に流るる

紫の葡萄をのぞく小雀の眼ただよはし秋の
 風吹く

秋風に翻り飛ぶ紅葉や疾くとおもふが疾くも飛びぬる

こほろぎのこほろぎ戀ひて音をつくしすだ
くさま見ゆ露草のかげ

感ひ泣く行けば悲しき旅の路行かずば寂し
里の隈ぞと

静かなる胸やたがひに涙落ちぬ桃の林の青
葉に立てば

君が岡にまろくも立てるひと本椎その椎見
ゆる有明月夜

人よいづこ麗しく咲く花見ては蔭に隠れて
名をば呼ぶかな

尋ね来て對へば花はひるがへり涙に消えて
さみしき頃や

別るる日君が涙のなど熱くわが路かくは寂
しく見ゆる

母のみ魂離るるひびき耳にしぬ嚴かなるに
目くるめきでは

姉よ涙隠したまひねこの夜をばかぎりの母
や惑ひたまはん

鉦鳴らし信濃の國を行き行かばありしなが
らの母見るらんか

野の雉子山の雉子も来ては鳴け御墓けうと
く悲しきさまや

面影は深くも胸に刻みたりひなしき墓よ苔
ひさば蒸せ

この磯の海の響とかの磯の響と似ると君は
いふらし

花咲かん夜とも思ひてともし火に油添へて
は照しけるかな

菫しんの香かに染しみぬる嘴くちをひらきては鶯うなきぬ
黎明しのめどき時ときを

はるかにも眺めやらるる春の朝行くに渡り
ぬ小野の浅水

頭かしらうづめ花と花とのささやぎのありやと思
ふ静かなる夜

眼閉せど浮かみもかぬる面影や君は春吹く
微風のごと

唇つぐみ見ては別れし巷人などやひと夜の
夢には入りぬる

星のさやぎ聞ゆとゆふべ立ち出でて人と逢
ひぬる棗のもとや

折りとりて瓶に挿したる白桃の花咲く日と
もなりにけらずや

わが胸に君はうつりつ君が胸にわれは映り
つ路遠さかな

君とわれ對ひてともに言葉あらず纒解さぬ
利根の秋の日

この心君と會ふべく君が住む南信濃よ雲白く照れ

故里に聽きにし蟲のかすかにも雜りて鳴くよ蟲賣る家に

明 暗他二歌集 自明治三十四年作 三十八首

わがおもひ言葉となるか秋の目の木犀に沁
みて香とかをる時

一片の雲や片方^{かた}は白う照り片方^{かた}は黒く動き
去りけり

秋木立遠く入りては物の音のありやと思ひ
たたずみて待つ

林檎食へば北陸前の十月の林のさまの眼に
も映りて

椎の實の珠の如きをひろひては秋美しくしむ
筑紫に入りて

さながらにかくてあれかし暫くは星もてる
なと夕野に立ちぬ

大海おほうみの底に沈みて静かにも耳澄ましゐる貝
のあるべし

我が涙そそぎし家に知らぬ人住みてさざめ
く春の夜來れば

え忘れずとありし時に我が母を女と知りし
物寂しさを

背後うしろより鶯啼きぬ山の手の坂路のぼる春の
ひる時

青嵐あせさと動ぶむ時君すてて我はそぞろに走ら
んとしぬ

切株はうす紫の若芽して桐となりけり六月
來る日

浴室やかをりえならぬ洗粉を身に塗りをれ
ば亡き子おもほゆ

面影も描くよしなく忘られてこの家にいま
す代代の親たち

夜來ればまづ石打ちて清き灯をかかげぞま
つるみ親らが前

晝の鐘ゆるく鳴り來るちははもいまさず
なりしふる里の家

春の日のかがやく海の上遠く生まれし國の
雪の山見ゆ

春の夜の宇治の川瀬の瀬の音の聞きつつを
れば我れを奪りゆく

川中のちひさき島の雪に似て白さが上に春
の日のさす

仁和寺のをぐらき厨子にともりたる晝のみ
灯あかしえしも忘れず

かの女何を泣きしやそは知らず蟲の音しげ
き夜よるなりしかな

白粥をすすりてをれば何となきものあは
れに涙まろび出づ

まだ住まぬ町にと小さき家さがしうつりゆく
なる春のくれ方

さくさくと草を刈る音まづかにも沼をわた
りて聞こえ來るかな

ぐみの實のあかき搜すと仰ぎみしわが眼に
 ふともうつりたる空
 わが持てるダアリア眺めひそびそと貧しき
 町の子らのゆびさす
 ぼと小き颯風^{つひ}起りて砂を上ぐ春の眞晝の静
 かなる路

砂の上に搔い膝しては甥とわが見やる興津
 の海暮れて行く

アメリカへ行く商船の甲板に立ちて見え
 ずもなりにける君

夏の海青さがはてに君が乗るアメリカ行^{ゆき}の
 船は消えにき

誰が家の門かどの鈴にや霧降りて静かに更けし
この夜半に鳴る

物多く言はぬ人ともなりにける昔の友を夜よる
の灯ひに見る

相逢へば必ずおのが身の上をおのが奥所おくがを
この人は言ふ

面つら玄かめ面つら玄かめても、青梅あをうめの酸ゆきをあは
れ音たてて囓む

命死なんかの嘆かひも若き日のわが慰みの
一つにありき

何となく君は吐息すつと明き灯かげの町に
入りにける時

労働の世界のうちに隠されしかのよろこび
を掴みぬわが手

わが妻のたまたまわれにいふ事はおとし
のことその前のこと

濁れる川

其一 自明治四十五年 作三十八首
至大正元年

つばくらめ飛ぶかと思れば消え去りて空あ
 をあをとほるかなるかな

うら若き楓の青葉そよろかにゆすりて風の
 隠れぬるかな

大跨に太郎あゆめばゆらゆらに五月の晝の
 日は躍りたり

菓子さらひ逃げて行く子のうしろつきあは
 れ大きくなりけるはや

涙ぐみ我とわが身にいふことのいつか怒り
 となりて来しかな

まるやかにかがやく海を前にして磯に拾へ
 り青き小石を

すてて行きし太郎が獨樂を手にとりて廻せば廻り心あもしろ

こころみに吹いて見ぬればわが笛はほろほろと鳴りてただあはれなり

東京の親の家には歸らじといふといふぞよ五つの太郎

おぢが家の家鴨と今日もあそぶらん太郎が上をその母はいふ

同類の人が住みてはかなしめるこの地の上に死ぬべきぞわれ

錢なきは鏡のこといひさみしきはさみしきことを言ひにけるかな

君もまたあはれむべしと友のいふさみしき
ことを聞かせける後

御輦の前に後になしくも物の音を吹くお
ほ行幸かも

何をさはさびしげにすと君いふか命たふと
くうれしかる故

子を連れて夕ぐれ町に出て来れば何ぞやわ
れの心もとなき

笛買うてもらはんいまだ吹かねばと言ひつ
つ子ほも眠りたるかな

ひとり子とその子の母をよるこばすたはや
すきをも惜しみたりさや

うるほへる黄玉に似て秋の山まろくも並ぶ
山べに來れば

蔦引けばその赤き葉のはらはらとこぼれつ
くじて蔓のさみしも

山峽さまかひのせまく峻しき路をよぢ息づきつつも
見たる空かな

男體の山の裾野のさみしかも語るとすれば
言葉わするる

まさやかに秋の空にぞうかびたる黒髪山の
山の鬘はも

夕さればさみしきものを湖のあなたに見え
て灯の一つともる

かがやける宮の渡殿踏みゆけば静かに鳴り
てわが身のたふと

一人の力のたふと下野の二荒の山を宮居と
ぞする

この大き都が持てるまどはしのさみしくも
消えてわが一人見ゆ

ひゆうと鳴る又ひゆうと鳴るさみしくも異
るなくも笛の音の鳴る

秋の雨地をうるほせば地のうちの草の種は
も芽をいだしたり

草の實のおびただしきを隠し持ち事もなげ
なる秋の庭かも

おそろしと避け行く人を君もまたおそろし
と見てえぞ近寄らぬ

人は皆ふたりして棲む紅蓮洞五十路そを近み
ただひとり棲む

何なればひとりば棲むと問ふ人もあらずな
りける紅蓮洞かも

世の爲の何をなしてかさばかりも貧しくて
ゐる紅蓮洞ども

金になることはなきやと言ひ出づる紅蓮洞
の面見おもてればかなしも

かりそめに妻がつぶやくことにだにあはれ
覺えて年逝かんとす

いささかの父があたふる物もちて喜べる見
れば子のあはれなり

いかにして費え少くこの親を葬らんなど聞
けばかしき

濁れる川 其二 大正二年作 四十四首

青やかにうるほひきたる空みれば眼吸まなこはれ
てはなち難しも

初夏の風に花びら吹かれつつ鉢にさきたる
くれなるの花

いつ知らず濃き縁ともなりにけり見ずやあ
り來し窓の青桐

マダネシユウム燃ゆれば子らの二三見え手
拍たたく見えて闇に消えけり

眠しとて歩みなやめる子が手引き歩ませゆ
けば夜の暗しも

六月の日をあびて立つ青桐のよろこび立つ
と見ゆるならずや

童は童とあそび子雀は子雀とあそび空のあ
をしも

たまきはる命保ちてやすらかに息すること
の有り難きぞも

夏の夜の真闇に眼さかざられ進みかねつも
ふる里の路

夏の夜の真暗さうちにつづきては行く行く
も見ゆふる里の路

われ来ればまげ手にして暗き家の暗き方
より姪のあらはる

掌を合せをがみまわれど申すことあらぬを
ぞ思ふちちははの墓

安らにもあはしたまふと苔生ひしちちはは
の石碑眺めて立つも

うす青くさみしく光る空のみの四方に見ゆ
る家に来つわれ

あやしくも空のみ眼には入る家ぞうす青く
しも山に落つる空

うす青く光れる空のさみしきにむかひをれ
ば虫のひそびそと啼く

うす青く暮れて行かんとする空のはるばる
に見え鐘鳴りきたる

小さき日えたるがやうに茅萱摘み矢に飛ば
すれば空の遠しも

などさしも珍しげにも我を見る親しとぞ思
 ふ故里の人
 話してありと思ふにわが心うす青き空に取
 られてありけり
 わが姪はうれはしげなる眼して我をば見つ
 つえどもの言はぬ

明るくも日の照る庭を眺めつつわが手置き
 にき姪が肩の上
 肉身のあやしきまでの親しさのいと悲しく
 もなりにけるかな
 さらさらとくらやみの庭に起る音水ぞと思
 ひ手探りにけり(徳本峠を越えて上高地に至る途上にて)

か黒なる山の山裾ともし火の一つ見ゆるに
 聲あげにけり

ほのぐらき湯壺のうちにわが入れれば一ひた
 りぬて物言はずけり

徳本とくほんの山押しつつみ眞白くも夕立の降れば
 死ねよと歩む

穂高岳ほのに光らせ雨雲の深さをもりて夕
 日さしぬれ

木立のみ生くべき園に入りや來し行く行く
 心さみしきぞわれ

見はるかす河原の石のしらじらと雪にかも
 似て水流れ來きたる

白樺の林の中にあらはれて歩み來る人のな
つかしきかな

もの言はぬ駒にしあれど生きものの汝れを
じ見れば我もたなずむ

一つ家の眼に見えくれば越えて來し山はろ
ばろに思ほゆるかも

夜來るとこの山奥の一つ家にランプともせ
ば瀬の音高しも

ぬば玉の夜としなれば闇の底にさみしく鳴
りて梓川きこゆ

夕さればおのづからにも知る人の相集りて
灯かげ守るも

語りやめ三四の人のいちやうに灯かげ守れ
ばさみし山の夜

うつそみの人の嘉門次この山に住む家見れ
ば人の身さみし

何事か思ひつつ野の路を來しわが眼を刺し
て山の雪しろし(木曾路に伯母を勸ひて)

わが面打ちて眞白く木曾山の雪のむら山重
なりつづく

雪越えて吹きくる風に面吹かれうつむきゆ
けばわが身いとしも

暗緑の松の林のうへ越えて眞白くも雪の山
の光るも

奈良井川ひろき河原に渡したる橋わたり行
けば冬の水ひかる

ここに立ちて電車を待つもこの店に煙草を
買ふも久しきにわれ

濁れる川 其三大正三年作 三十八首

習志野の杜の鈴蘭歸るさに取らんとおもひ
見失ひにけり

わが顔の次第に兄に似ても來と聞くにさみ
しき兄の顔みゆ

子の顔を見つつしをればかはゆともかなし
とも見ゆわが顔に似て

庭の隅に残りてありし白雪の一と夜にや消
えし今朝は見えずも

青海よ汝がつめたくもはるけくも連るにこ
そ眼はなち難しも

かしここにぞ行きて見てまし海に向ひ並ぶ五
六の家のさみしも

うれしさを眼もて眼にいふ朝床を出て来て
妻に小さき子らに

肱まげていでうたた寝もして見まし暖きか
な世の頼もしく

あれもせねばならずと思ひ程もなく忘れ去
りにけり今日あたたかし

夕されば市の遠音のなつかしく聞えくる日
となりけらしな

見詰めずにありえぬものにわがしたる心よ
汝れもあはれなりけり

強かれと願ふ心のいつしかに馴れては我を
強しと思ひつ

親の手をはなれて旅にいでにける第一日に
似ぬころかな

うたはぬを怪しみつつも籠の鳥ながめてあ
れば我も静かなり

あくびすと出でてし涙をを指もて拭ひても見
しめづらししかれか

夜の空の暗きがうちにほのに見え見るに消
えつも雪の遠山とほやま

日あたりのこの河きしに露よきの臺とら青くならび
て山に雪ひかる

見出でてはうれしみてわれ立ちて見つたん
ほばの身はよ露の臺はよ

千鹿頭の山はしら雪はやも消え紫立ちて見
ゆるならずや

御射山の山のしら雪眼を刺してかがやきに
つつ消ゆるころかも

まののめの空のさ青にうかみいてあな真白
くも雪にひかる山

まののめの空のあやしも雪白き山のごとご
と生くらくも見ゆ

まののめの空のあやしも思はざる方かたにあら
はれ雪の山見ゆ

まののめの小暗き空にはるかにも見え来る
山は八が岳かも

雪あける日本アルプス玄ののめの汝が清け
さは人死なすべし

紫にけむれる山の峽越えて乗鞍ぞ見ゆ雪に
真白く

槍が岳汝が高尺のいただきもさみし手の上
の雪かとぞ見え(曾遊の日を思ひて)

常念のかの高やまは何れぞと眼もて捜しぬ
群ら山のうち

雪まろきこのまののめの高原に煙突の立ち
てけむり上ぐるも

真白なる雪の群ら山われかこみ朝日出づる
と光りたりるかな

人行かざなれる箱根の古道よるみちに石だたみこそ
つづきたりけれ

箱根路のこのまさみしき山の上に家焼けし
とて家を造るも

いやならばいやと言へよとわが太郎遊び仲
間といふ聲高し

いやならばいやと言へよとこの子らの遊び
つついふ言ことのよろしさ

何故の心細さぞ眼の前の黒き机に灯のうつ
りつつ

茶碗など洗ひさしてはつれづれと眼の前を
見て妻のゐる見ゆ

かがやきしかの白雲のいかにせし眼をやれば空のただに真青き

心づけば一心になりて眼の前の火鉢の火をば見つめをりしかな

うち並べ火鉢の上にかざしたる小さき手見ればわが兒のかはゆ

大正四年十二月十日印刷
大正四年十二月十日發行

實價金拾五錢

編輯者 内藤銀策
發行所 小石川區白山御殿町三十二番地

印刷者 白土幸力
神田區美土代町二丁目一番地

不許複製

發行所 抒情詩社
東京市小石川區白山御殿町三十二番地

傑作歌選

第一輯	* 若山牧水	第七輯	* 齋藤茂吉	定價
第二輯	* 武山英子	第八輯	* 石川啄木	送厚
第三輯	* 窪田空穂	第九輯	田波御白	各料
第四輯	* 尾上柴舟	第十輯	島木赤彦	每表
第五輯	金子薫園	第十一輯	内藤銀策	金册
第六輯	土岐哀果	第十二輯	* 前田夕暮	紙製
				五錢
				二本

以下續刊

傑作歌選
別輯

* 高村光太郎
與謝野晶子

菊半截百二十頁天金特製本
定價金二十五錢送料金二錢

278
490

ピョルンソン氏原作 法學士岩谷禎次氏譯	短篇	高原物語	菊中截判約三百五十頁 定價金八十五錢送料金六錢
故田波御白氏	歌集	御白遺稿	四六判二百六十六頁 定價金九十錢送料金八錢
高村光太郎氏	詩集	道程	四六判三百二十六頁 定價金壹圓送料金八錢

東京抒情詩社發行

終

0
5